

おん な おきはら
恩名沖原遺跡出土

あ さ ば ち
浅鉢

この浅鉢は恩名沖原遺跡J-22号住居址の柱穴内から出土したもので、縄文時代中期中葉に作られたものです。土器型式では勝坂2式に相当します。

浅鉢は器高が低く口縁が大きく開く形状をしたもので、食べ物の盛り付けなどに使われたものと考えられています。本資料の器高は14.5cm、外径は44.0cm。底部は欠失していましたが、現状では復元されています。

土器の外面は無文で、口縁部上面と内面に文様が施されています。本資料の大きな特徴として、土器の内面に隆帯と連続爪形文、小波状沈線などを用いた魚のような文様が一對、向かい合うように描かれていることが挙げられます。同様のモチーフは全国的に見てもほとんど事例が確認されておらず、縄文時代における動物意匠や縄文土器の造形を考える上で非常に貴重なものです。また、本資料のように内面に立体的な文様が描かれる事例も、非常に珍しいものといえます。

なお、本資料は器面の一部に漆と思われる黒色塗料が塗られていた痕跡が見られることから、本来は彩色が施されていたものと思われます。日常的な土器とは異なったマツリなどの場で使用される特別な土器であった可能性が考えられます。

